

中世浄土真宗資料に見られる急・緩入声点と舌内入声音

佐々木 勇
(受理日二〇一一年一〇月六日)

一、先行研究と本稿の目的

1. 入声点「急」「緩」に関する先行研究

親鸞自筆写本中に、「●」「○」「●●」「○○」の四種類の声点が使用されているものがある。

それらの資料では、「●」を「清」、「○」を「濁」とし、入声においては、「●」清急(スウテキフ)・「○」濁急(ニコリテユル)・「●●」清緩(スウテユル)・「○○」濁緩(ニコリテユル)の四種が区別される。

「急」は開音節化しない舌内入声音と入声の促音を、「緩」は開音節化した喉内入声音と唇内入声音を示していたことが、坂東本『教行信証』に加点された声点の分析から明らかにされている。

2. 本稿の目的

本稿の目的は、親鸞が用いた声点として知られる、入声点「急」と「緩」との機能について、資料を追加して確認するとともに、中世における舌内入声音の発音について考察することである。

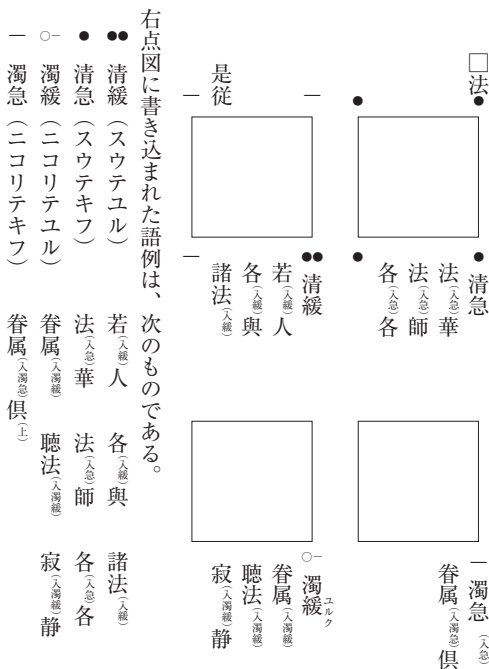
二、親鸞自筆本における入声点「急」と「緩」

1. 声点図における入声点「急」と「緩」

親鸞は、西本願寺蔵『観無量壽經註』・同『唯信抄』に、漢語例を掲げて、声点図を記している。

左に、寛喜二年(一一三〇)親鸞自筆本西本願寺蔵『唯信抄』巻頭の点図を掲げる。(以下、本稿では、声点を、(平)(平濁)(上)(上濁)などとする。入声点については、「清急」を(入急)、「濁急」を(入濁急)、「清緩」を(入緩)、「濁緩」を(入濁緩)とする。)

豊後國大蔵供奉聲也 八幡大菩薩納受之聲也



「緩」の声点が加点されるのは、「若・各・属・寂・法」の喉内入声k・唇内

入声 p を有する漢字である。しかし、これらの漢字でも、「法ハク華・法ハク師・各カク眷クワン屬リョク俱ク上シヤウ」という語においては「急」となることが例示されている。

これによって、「急」声点は、喉内入声・唇内入声音が促音化した場合に加点されることが知られる。巧みな挙例である。舌内入声 t は、基本的に「急」であるため、例を挙げることが省略されたものであろう。

これらの点図によっても、坂東本『教行信証』の声点から帰納された入声点の機能を確認することができる。

2. 親鸞の字音直読資料における入声点「急」と「緩」

『教行信証』以外の親鸞自筆本では、西本願寺蔵『觀無量壽經註』『阿弥陀經註』に、「急」「緩」の入声を区別する声点が加点されている。本稿の筆者は、この西本願寺蔵『觀無量壽經註』『阿弥陀經註』における入声点の「急」と「緩」とについて、かつて、先行研究と同様の分析を加えた。その旧稿を、『増補親鸞聖人真蹟集成 第七巻』（二〇〇六年、法蔵館）によって明瞭となった朱筆に依って補訂した結果を、左に掲げる。これは、句末か句末以外かを、親鸞加点の句切り点に依って判定し、入声点の延べ数を記した表である。句末以外の例は、後続字の頭音によって、分けた。後続字頭音は、当該字の呉音のそれを取り、本資料当該例の声点によって清濁を判定した。当該例に声点が存しない場合は、本資料中の当該字声点加例のものに依拠した。

a 「急」の入声点

喉内 k		唇内 p		舌内 t		声点
濁急	清急	濁急	清急	濁急	清急	
2	53	19	9	13	24	下接字頭音 無声
0	1	0	0	9	27	有声
0	1	0	0	8	20	句末

b 「緩」の入声点

喉内 k		唇内 p		舌内 t		声点
濁緩	清緩	濁緩	清緩	濁緩	清緩	
11	36	6	7	0	5	下接字頭音 無声
18	37	11	10	0	6	有声
28	15	9	8	0	0	句末

右のごとく、西本願寺蔵『觀無量壽經註』『阿弥陀經註』においても、「急」の声点は、舌内入声、または、無声音が続き促音化の可能性がある入声字に加点されている。

一方、「緩」の声点は、下接字の頭音にかかわりなく、唇内・喉内入声字に對して加点されている。

この原則に合わない例は、左の五字十三例である。

- a. 喉内入声字に「急」入声点を加点した例（全二例）
- 〔遍〕此人苦逼クヒツ（觀五九六）所逼ソヒツ（云クモ何ナニ當見トモミ（觀一三五）
- b. 舌内入声字に「緩」入声点を加点した例（全十一例）
- 〔二〕一ヒツ入ツ時トキ一ヒツ入ツ異ヒツ之ノ言コト（上ウヘ）第一ヒツ入ツ日ヒツ（上ウヘ）無ム量リヤウ壽ジュウ觀カン經キヤウ一ヒツ入ツ觀カン卷クワン（上ウヘ）
- 〔日〕日ヒツ入ツ觀カン經キヤウ七シツ沒ムツ日ヒツ
- 〔七〕第七ヒツ入ツ觀カン經キヤウ七シツ日ヒツ
- 〔八〕第八ヒツ入ツ觀カン經キヤウ七シツ日ヒツ

a の「遍」は、保延本『法華經單字』鎌倉期点で「ヒツ」、『觀智院本類聚名義抄』「和音」でも「ヒチ」と仮名書きされている。図書寮本『文鏡秘府論』保延点、興福寺本『大慈恩寺三藏法師傳』院政期点にも「ヒツ」の加点が見られ、当時、日本漢字音では、舌内入声字として扱われている。親鸞遺文にも、「遍ヒツ入ツ時トキ一ヒツ入ツ異ヒツ之ノ言コト（上ウヘ）第一ヒツ入ツ日ヒツ（上ウヘ）無ム量リヤウ壽ジュウ觀カン經キヤウ一ヒツ入ツ觀カン卷クワン（上ウヘ）」をチと書いた例が有る。そのため、本資料でも、舌内入声字相当の「急」入声点が加点されたもの、と考えられる。

また、b から、当時、右のような語の中では、これらの舌内入声字が開音節化して発音されることが有ったもの、と考えられる。右のうち、「一・日」は、坂東本『教行信証』においても、左の「緩」声点加例が見られる。

- 〔二〕一ヒツ入ツ時トキ一ヒツ入ツ異ヒツ之ノ言コト（上ウヘ）第一ヒツ入ツ日ヒツ（上ウヘ）無ム量リヤウ壽ジュウ觀カン經キヤウ一ヒツ入ツ觀カン卷クワン（上ウヘ）
- 〔日〕日ヒツ入ツ觀カン經キヤウ七シツ沒ムツ日ヒツ今イマ日ヒツ入ツ觀カン經キヤウ七シツ沒ムツ日ヒツ

多くの舌内入声字の韻尾が「佛フツ」「物モツ」「出シュツ」など、「一イツ」表記され、そのように発音されて今日に至る中で、右の「一・七・八・日」は、今日でも「一イチ」と書かれ、読まれる。ここから、これらの漢字は、他の舌内入声字よりも早い時期に、「一イチ」の音で開音節化して発音される場合が存したことが推測されていた。しかし、その証明は困難であった。それが、この特

殊な声点によって、立証される。

三、親鸞自筆本以外の資料における入声点「急」と「緩」

1. 専修寺蔵『入出二門偈頌』建長八年真佛写本

三重県津市専修寺に、高田派二世真佛（一二〇九—一二五八）の建長八年（一二五六）書写になる『入出二門偈頌』が現存する。その全頁写真が『影印高田古典』第一巻（真宗高田派教学院、一九九六年）に取められ、公刊されている。奥書は、次の通りである。

建長八歳丙辰三月廿三日書写之

これによって、真佛四十八歳、親鸞八十四歳時の書写本であることが知られる。

この『入出二門偈頌』真佛写本にも、字音直読の声調を示す朱声点加点が、**「急」と「緩」**とを区別する入声点が見られる。

その入声点全体を、親鸞筆『阿弥陀経註』『観無量壽経註』と同様に整理し、その加点数を表にすると次のようになる。

喉内 k		唇内 p		舌内 t		声点
				濁急	清急	
濁急	清急	濁急	清急	濁急	清急	無声
2	3	1	3	7	23	有声
0	2	0	0	3	15	句末
1	1	0	0	2	3	

喉内 k		唇内 p		舌内 t		声点
				濁緩	清緩	
濁緩	清緩	濁緩	清緩	濁緩	清緩	無声
5	19	0	9	5	0	有声
5	39	4	15	9	5	句末
1	11	0	4	1	0	

a 「急」の入声点

b 「緩」の入声点

本資料にも、親鸞筆『阿弥陀経註』『観無量壽経註』と同様の原則が見られる。本資料に、親鸞筆『阿弥陀経註』『観無量壽経註』と比較して、例外がやや多いのは、親鸞自筆本から移点した際の誤写であろう。この本の訓点について詳しくは、別稿を参照願いたい。

2. 専修寺蔵『四十八誓願』建長八年真佛写本

専修寺蔵『四十八誓願』も、『影印高田古典』第一巻の写真でその全容が知られる。本資料は、本文・訓点とも、真佛の書写になると考えられている（上の影印本所収、中川和則解説、参照）。本資料には、次の奥書が有る。

建長八歳丙辰四月十三日書之

右『入出二門偈頌』と同じく建長八年（一二五六）の真佛写本である。

本資料朱声点も、字音直読の声調を示している。右と同様に、本資料の入声点を整理した結果を表にする。

喉内 k		唇内 p		舌内 t		声点
				濁急	清急	
濁急	清急	濁急	清急	濁急	清急	無声
1	3	2	0	0	7	有声
0	0	0	0	0	5	句末
0	0	0	0	1	3	

喉内 k		唇内 p		舌内 t		声点
				濁緩	清緩	
濁緩	清緩	濁緩	清緩	濁緩	清緩	無声
3	13	0	0	0	0	有声
0	3	3	3	0	0	句末
4	6	4	2	0	0	

a 「急」の入声点

b 「緩」の入声点

右の通り、専修寺蔵『四十八誓願』には、「急」が舌内入声字または無声音が続く入声字に、「緩」が唇内・喉内入声字に対して加えられるという原則から外れる例が皆無である。

全体の加点例がわずかであるものの、前項『入出二門偈頌』真佛加点本に親鸞自筆本と異なる例が少なからず存したのと比べ、本資料の声点加点は正確である。

これは、親鸞加点本を真佛が移点したのではなく、当時八十四歳であった親鸞が直接加点したためではないか、と考えられる。

3. 専修寺蔵『観無量壽経註』『阿弥陀経註』一三一七・八年存覚書写移点本

親鸞の孫覚如（本願寺第三代）の長子存覚（一二九〇—一三七三）は、文保元年（一三一七）三月から翌年九月まで、一年七ヶ月をかけて、親鸞自筆『観

無量壽經註』『阿弥陀經註』を筆写している。

その原本が、これも専修寺に伝存する。原本閲覧の機会が未だ得られないため、平松令三編『高田本山の法義と歴史』八八頁掲載の写真に基づき、その奥書を翻刻する。

此本者以上人御自筆懺所奉寫也自去年丁巳／季春之候至今茲戊午暮秋之天涉兩載數月之／居諸終一卷二經之書寫訖經文釋文之交付也／愚蒙易迷大字小字之連點也不審難明之間為顧短慮雖致固辭依願主懇勸之懇望勵小量隨分之／微功者也努力、可被止外見而已／右筆釋存覺〔廿九歲〕

この奥書の通り、親鸞自筆本の厳密な複製本の如き臨模本である。『高田本山の法義と歴史』掲載写真に依る限り、声点も、親鸞自筆『觀無量壽經註』『阿弥陀經註』と完全に一致する。

4. 西本願寺蔵『淨土三部經』正平六年存覺寫移点本

存覺は、三十年余り後の正平六年（一三五二）に、もう一度、親鸞自筆『觀無量壽經註』『阿弥陀經註』を写している。この時は、『無量壽經』と合わせ、『淨土三部經』一具とした。

正平六年存覺寫『淨土三部經』のカラー写真を、浄土真宗本願寺派教学伝道研究センターのご厚意により、拝見する機会に恵まれた。

正平本『淨土三部經』の奥書は、それぞれ次の通りである。〽は原本の改行、〽内は、割書きを示す。

〔觀無量壽經〕

正平六歲（一三五二）辛卯十一月七ケ日御報恩念佛中參籠／本願寺之間以上人御自筆本差聲切句畢日來／所奉寫持之本先年於關東紛失之間今楚忽／奉寫之後日以此本可奉書寫安置者也／於上下堺之上下并行間雖被記疏文略之 釋存覺
（以上、朱筆。）

〔阿弥陀經〕

正平六歲辛卯十一月二十八日於大谷御廟以御自筆寫聲并句畢御本所被披觀經也稱讀／淨土經文并法事讀元照律師釋等雖被載之今所略也 釋 存覺
（以上、朱筆。）

〔無量壽經 卷上〕

正平六歲辛卯十二月十五日切句差聲畢朱點是也本者／御室戸大進入道殿〔有範〕／上人御親父 御中陰之時兼有律師被加／點之由往年承置之間所寫

之也外題者上人御筆也少、不慮之事等雖有之併任本畢先卒爾寫之後日加／料簡可點他本者也 存覺
（以上、墨筆。）

〔無量壽經 卷下〕

貞和二歲（一三四六）丙戌六月十一日以一念形木摺本／書之（但為早速用草字之／間不守點畫）則寫彼流點畢／折臂老法印光玄（五十／七）

彼本與書云

御本云

嘉禎二年（一二三六）丙申十二月廿八日以真如寺殿御本／移點了性／同三年丁酉三月廿七日以肥州本校點了性／同廿八日以同本切句竟云、

又云

文永二年（一二六五）乙丑七月五日於法藏寺御房以御本／（即八條聖人／御本也）點校等竟

文永十二年（一二七五）乙亥四月十五日以顯御本移點竟

同廿九日校合了

已上本與書也

彼本願成就文以下處、科文等并私付一流之義／令記付事等濟、焉今併略之只文點等廣有／欲見合之思仍寫之而已又件本或以義叙／懽興等之尺勘入之或以玉篇廣韻等改字義等／今同略之件勘文故昌暹法眼筆跡也／然者声假名等合點以故尊真上人之說／允用欺件上人之說當初即雖相傳之／愚本紛失之間老味之後忘却多端仍／就見及寫之當卷委點大切之故相勵／損手不便、左道、

貞和四歲（一三四八）戊子十月五日以興國寺本見合加點畢所／載左之點是也（存覺花押）

件本與書云

於西山參鉢寺以本御坊上人 善 御自筆之御經寫點了了件本者在當寺之經

藏 馴空

正平六歲（一三五二）辛卯十二月十七日切句差聲朱點是也／寫本之由來等委記上卷與畢 存覺
（以上、すべて墨筆。）

右の奥書から、存覺は、正平六年（一三五二）十一月末〜同十二月十七日に

かけて、「観無量壽經」「阿弥陀經」「無量壽經」の順に、「聲并句」を移点したことが知られる。

『観無量壽經』『阿弥陀經』は、「上人御自筆本」（親鸞自筆本）の「聲并句」を写した。

一方、『無量壽經』は、上巻奥書によれば、親鸞の父有範の中陰供養に際し、兼有律師（親鸞の弟）が加点了したものを「本」とする。題（外題）は、「上人御筆」（親鸞自筆）であった。

親鸞が外題を記した他の写本の状況から見て、『無量壽經』の声点ならびに句切点も、親鸞自筆本の訓点を移点させた後、親鸞自ら点検・補訂した可能性が高い。

この浄土三部經には、『観無量壽經』『阿弥陀經』ばかりでなく、『無量壽經』にも、「急」と「緩」とを区別する入声点が入声点とされている。

a 「急」の入声点

喉内 k	唇内 p	舌内 t	声点	
			濁急	清急
濁急	濁急	濁急	10	33
0	0	0	16	38
0	0	0	20	38

b 「緩」の入声点

喉内 k	唇内 p	舌内 t	声点	
			濁緩	清緩
濁緩	濁緩	濁緩	33	58
29	27	0	4	4
44	32	13	0	1

本資料の調査範囲では、「急」「緩」声点の対応原則から外れるものは、第一に、句末あるいは有声音が続くにもかかわらず、「急」の声点が加点了された喉内入声字二例である。

〔益〕无入急〔得〕得入急 聞亦難

両字とも無声化した発音を、「急」として捉えたものであろうか。

対応原則から外れる第二は、「緩」の声点が加点了された左の舌内入声字である。

〔七〕七入急 歩入急 〔日〕日入急 世入急 〔裂〕裂入急 魔入急 〔徹〕徹入急 靡

〔鐵〕鐵入急 困入急 〔跌〕蹉入急 跌入急

〔七〕と「日」とには、親鸞自筆『観無量壽經註』『阿弥陀經註』でも緩声点

が加点了されていた。本資料でも、開音節化した発音を反映する加点了であろう。よって、同じ声点が加点了された「裂・鐵・徹・跌」も、右の語例においては、開音節化していたと考えざるべきであろう。

5. 龍谷大学蔵『彌陀經義集』正平七年覺忍写本

龍谷大学図書館に、正平七年（一三五二）覺忍写『彌陀經義集』（021-133-1）が蔵されている。

奥書は、左の通りである。

寛元二年（一二四四）四月 日 書写訖功者也／執筆老味尊阿（在判）
／六十三歳

正平七年（一二三三）（壬辰）初貳月七日奉書寫安置之訖／右筆覺忍（歳十八）戒三／願主釋學念（生歳／四十六）

寛元二年（一二四四）の本奥書に記される尊阿は、尊運とも名乗った堀川三位入道・宮内卿である。親鸞の従弟で、帰洛後の親鸞に教えを受けている。

本資料は、仮名字体・雁がね点も、鎌倉中期の実態をよく写している。十八歳の右筆覺忍が、寛元二年本のままを写したものであろう。

その覺忍は、次の龍谷大学蔵『無量壽經』奥書「覺忍禪尼被付属光助法印訖」の「覺忍禪尼」であると推定されている。

この本の朱点は本文を訓読しており、その訓読中の漢語に加点了された朱声点が入声に「急」「緩」を区別している。短文の資料であり、訓読中の漢語に加点了された声点のみであるため、本資料の声点加点了は少ない。その全加点了例を、右諸本と同様の表に数値化してみる。

a 「急」の入声点

喉内 k	唇内 p	舌内 t	声点	
			濁急	清急
濁急	濁急	濁急	0	0
0	0	0	1	2
0	0	0	1	2

b 「緩」の入声点

喉内 k	唇内 p	舌内 t	声点	
			濁緩	清緩
濁緩	濁緩	濁緩	1	5
0	0	0	3	13
4	1	1	0	0

「急」「緩」声点の対応原則から外れるのは、次の例である。
 語末あるいは有声音が続くにもかかわらず、「急」の声点が加点了喉内入声字（二字二例）。

〔獄〕闇獄^{〔急〕}（十二ウ5） 〔即〕即^{〔急〕}具^{〔平〕}（十六オ1）
 舌内入声字であるにもかかわらず、「緩」の声点が加点了された例（二字二例）。
 〔實〕實^{〔急〕}寶^{〔平〕}（十三オ6） 實^{〔急〕}（十ウ6）

先の二例は、急声点が加点了される音声的理由が存したものであるうか。あるいは、時代を通じて最も一般的な「^{〔急〕}」形式の声点が、移点者によって加点了されたに過ぎないのかもしれない。

舌内入声字「實」に、緩声点が加点了された例は、坂東本『教行信証』にも存する。当時、開音節化して発音されることが有ったものであるうか。
 本資料には、奥書に親鸞の名は見られない。しかし、当時希な欠画字「竟」が存することから、親鸞書写本を底本としていると考えられる。

また、ごくわずかな本資料声点は、その加点了字・加点了位置とも、専修寺藏真佛写『彌陀經義集』に加点了された声点と多く一致する。この真佛写『彌陀經義集』声点の依拠本も不明である。しかし、他の真佛書写本から類推して、親鸞書写本の声点を移した可能性が高い。

したがって、真佛写『彌陀經義集』の声点に近い、この龍谷大学蔵『彌陀經義集』の声点も、親鸞に源を発するものであろう。

6. 龍谷大学蔵『無量壽經』（02112912）南北朝期朱点

龍谷大学蔵『無量壽經』上下二巻二冊（02112912）南北朝期朱点が、4. 正平本『無量壽經』と同じく、親鸞の字音点を移点したものであることは別稿で述べた。

したがって、「急」「緩」入声点の整理結果は、次のごとく、右正平本『無量壽經』とほぼ全同となる。

a 「急」^{〔急〕}の入声点

声点	下接字頭音		
舌内 t	濁急	清急	無声
	14	35	
	15	38	有声
	20	35	句末

b 「緩」^{〔緩〕}の入声点

声点	下接字頭音		
舌内 t	濁緩	清緩	無声
	0	1	
	0	4	有声
	0	1	句末

喉内 k	唇内 p		
濁急	清急	濁急	清急
10	31	10	24
0	1	0	0
0	1	0	0

喉内 k	唇内 p		
濁緩	清緩	濁緩	清緩
32	59	6	22
30	72	27	30
44	64	31	12

「急」「緩」声点の対応原則から外れる例も、正平本と完全に一致する。この本には、上下巻とも巻末に、次の奥書が墨筆で書かれている。

覺忍禪尼被付属光助法印訖／康安元年（一三六一）十一月十七日

この奥書は、4. 西本願寺蔵『浄土三部經』正平六年本を書写した存覺の筆になると伝えられ、そのように認められている。

上下巻とも表紙見返しに、奥書と同筆で、「常樂臺 三部四卷内」と記されており、これらの字体は、存覺の字体であると判断される。

この「三部四卷内」の書き込みから、本来は、『阿弥陀經』『觀無量壽經』とともに『浄土三部經』（三部四卷）として伝わっていたことが知られる。常樂臺は、常樂寺の前身で、存覺が暦応元年（一三三八）に洛西大宮に一坊を営んだのにはじまる。

奥書に見られる「覺忍禪尼」は、5. 龍谷大学蔵『彌陀經義集』正平七年本の書写者であった。

以上六点が、管見の範囲で、入声に急・緩を区別する声点加点了が見られる親鸞自筆本以外の資料である。

いずれも、親鸞自筆本を移点した資料か、親鸞に近い人物が書写・加点了したもの、あるいはその転写本である。

四、中世日本漢字音における舌内入声音の閉促性

親鸞自筆『觀無量壽經註』『阿弥陀經註』に加点了された入声点の「急」と「緩」とは、次の場合に加点了されるのが原則であった。

〔急〕^{〔急〕}——舌内入声音と入声の促音。
 〔緩〕^{〔緩〕}——喉内入声音と唇内入声音。

親鸞の弟である兼有が加点了した『無量壽經』、および、親鸞の従弟尊阿加点了

『彌陀経義集』の入声点も、右の原則に一致した。

本稿の検討によつて、坂東本『教行信証』の声点に基づいて先行研究で説かれた入声点「急」「緩」の機能を、複数の文献によつて確認することができた。

沼本克明は、かつて、「この親鸞の方法はその前後の時期に他に同類のものを見出すことが出来ない所から判断して、親鸞一代限りのものであったと考えざるべきものであろう。」と述べた。

本稿では、親鸞自筆本とその移点本以外に、弟・従弟が加点した本における加点例を指摘した。よつて、「親鸞一代限りのもの」とは言えない。

ただし、弟・従弟加点本の祖本は、親鸞加点本であったかもしれない。よつて、詳しい調査を経た後でなければ明言できないものの、入声に「急」と「緩」とを区別する入声点は、広く使用されたとは言えそうにない。親鸞と親鸞にごく近い人物が、字音直読資料と一部の漢文訓読資料に用いているのみである。

なお、親鸞・真佛・存覚等も、本稿で採り上げた資料以外の、多くの漢文訓読資料および漢字仮名交じり文への声点加点においては、入声の急・緩を区別していない点は、注意を要する。

この状況から、舌内入声¹が、入声の促音と同じ範疇に捉えられる閉促性を保つて発音されたのは、字音直読と限られた漢文訓読資料における漢字音の場合のみであった、と考えられる。

その他、多くの漢文訓読資料および漢字仮名交じり文資料においては、入声音に急・緩を区別する必要がないと判断されたことから、字音直読資料と異なり、それらの文献では、舌内入声音も開音節化されることが少なくなかった、と考えられよう。

さらに、声点が加点されない親鸞自筆『唯信抄文意』¹⁵「一念多念文意」の類は、より一層、入声音の開音節化が進んでいたものであろう。

本稿で採り上げた入声点使用資料の残存状況と、高田派二世真佛筆『入出二門偈頌』にも原則から外れる例が多いことから、親鸞はこの四種の入声点を周囲の人々に熱心に教育したとは考えられない。

それは、この厳密な発音の区別は、経文を音で直読する場合、または、経・釈漢文本文を訓読する場合の一部で実行されるものであり、それ以外の発音ではこだわる必要がない、と考えたためではなからうか。

したがって、中世初期浄土真宗の一部資料に見られた入声点の急・緩と、中

世末期キリシタン資料における規範的なローマ字表記とを根拠として、舌内入声音の閉促性が、すべての場・位相において中世を通じて保たれていた、と考えてはならない。

【注】

(1) 小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(『東洋大学大学院紀要』第2集、一九六五年九月)、沼本克明「漢字音に於ける促音の表示法」(『国文学攷』第六十九号、一九七五年十月。後、沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)付論第二章に改稿所収)。

しかし、指摘されている坂東本『教行信証』における「急」「緩」の入声点と、舌内・喉内・唇内入声と促音との対応には、例外が多い。その原因は、坂東本『教行信証』の声点は、複数種のものが混じているためである。これについては、別稿を準備中である。

(2) 佐々木勇「親鸞筆『阿弥陀經』『觀無量壽經』の漢字音について」(『比治山大学現代文化学部紀要』創刊号、一九九五年三月)。

(3) 本資料のカラー写真を、真宗高田派本山専修寺から貸与していただいた。心より感謝申しあげたい。

(4) 佐々木勇「専修寺蔵『入出二門偈頌文』建長八年真佛写本の訓点について」(『ことばとくらし』第二三号、二〇一二年十月)。

(5) これについては、別稿を準備中である。しかし、本文・振り仮名は真佛書写であることと、声点が親鸞自筆であることが未だ認められていないため、本稿では、この「親鸞自筆本以外における入声点「急」と「緩」の項に置いた。

(6) 当時の教学伝道研究センター長故浅井成海先生、本願寺教学伝道研究所長満井秀城先生、種々お世話下さった三栗章夫先生はじめセンターの皆様、心中より御礼申しあげます。

(7) 本資料は、全頁カラー写真がインターネット上に公開されている(龍谷大学電子図書館貴重書画像データベース)。学恩に感謝したい。

(8) 『真宗新辞典』(一九八三年、法藏館)・『真宗人名辞典』(一九九九年、法藏館)に依る。なお、長浜市光照寺蔵『親鸞聖人物御門弟等交名』には、

- 「沙弥尊蓮 シャミソウレン 堀川三品禪門 ホリカハノサムホムセンモン」と記される。
- (9) 白川晴顕・三栗章夫・岡村喜史「『黒谷上人語燈録』の書誌について」(浅井成海編『黒谷上人語燈録(和語)』(一九九六年、同朋舎出版)所収)、参照。
- (10) ただし、真佛写『彌陀経義集』の声点には、入声点における急・緩の区別が無い。
- (11) 佐々木勇「西本願寺蔵『浄土三部經』正平六年存覺書写本の朱点について——親鸞自筆加本および龍谷大学蔵南北朝期加本との比較——」(『訓点語と訓点資料』第一二六輯、二〇一一年三月)。なお、本資料も、その全頁カラー写真が、「龍谷大学電子図書館 貴重書画像データベース」上に公開されている。
- (12) 藤堂祐範『浄土教版の研究』(一九三〇年、大東出版社)、龍谷大学図書館編『龍谷大学図書館善本目録』(一九三六年、龍谷大学出版部)、注(9) 白川・三栗・岡村論文、参照。
- (13) 龍谷大学蔵存覺筆『末法燈明記』(021-82-1)とも同筆である。
- (14) 注(1) 沼本論文。
- (15) 佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』(二〇〇九年、汲古書院)第三部第五章、参照。
- (16) 『言語学大辞典 第六卷【術語編】』(一九九六年、三省堂)「入声」の項には、次の記述が有る。
- (前略) このうち、フについては室町時代終わり頃までは、「発熱」tonet、リの場合があり、現在も謡曲などの発音に伝承されている。ただし、こうした発音が社会階層のどのあたりまで一般的にもちいられていたかははっきりしない。

The Implosive Marks and the T-implosive (舌内入声音) in Jodo Shinshu's (浄土真宗)
Texts of the Middle Ages

Isamu Sasaki

Abstract: The purpose of this study is following two points.

1. Check a function of the implosive marks.
2. Consider the pronunciation of the t-implosive in the Middle Ages in Japan.
As a result of examination of this study, the next points became clear.
 1. The “急入声点” implosive marks are added to the t-implosive and the assimilated sound.
 2. The “緩入声点” implosive marks are added to ki/ku/fu-implosive sound.

But the texts that these implosive marks were added were extremely limited.

Furthermore, Shinran (親鸞) who was a scholar of those implosive marks, did not add those marks in the texts which in the kanji kana mixture sentence.

From the above mentioned situation, when it was limited, the t-implosive was realized.

Therefore, we must not think that the t-implosive was kept in all cases of the Japanese Chinese word until an end in the Muromachi era.

Key words: implosive, implosive marks, Japanese pronunciation of a Chinese character

キーワード：入声音, 入声点, 日本漢字音